

平成 27 年度英語科新任授業研修会 報告書

日時 平成 27 年 11 月 5 日 (木)	場所 静岡県富士見中学校・高等学校
	記載者 瀧本 真琴 印

部会参加者
部会長 松山 康夫 (静岡女子)
副部会長 土屋 賀永 (加藤学園)
専門委員 山田 由紀子 (沼津中央)、瀧本 真琴 (静岡英和) 東 孝次 (静岡雙葉)、
玉川 三紗子 (常葉菊川)、鈴木 富美子 (浜松海の星)
その他、参加者は名簿にて確認してください。

研修報告事項 (その 1)

1. 研修目標「新しい時代の英語教育」

2. 開会式 13:20~13:35 (受付 13:00~13:20)

部会長挨拶

会場校校長挨拶 自身の高校時代の英語教育を振り返り、英語は努力が報われる教科であると感じた。今後も時代の進化と共にさらに進んだ英語教育に期待したい。

3. 授業見学 (5 時限) 13:45~14:35

富永理恵先生 (普通科進学コース 1 年 8 組 男子 16 名、女子 18 名、計 34 名)

使用教材: **Grove English Communication I** (文英堂)

Lesson 6 "Eric Carle: How He Creates His Art" Part2

●展開

挨拶後にいくつかの簡単な英語の質問を投げかけ、**Warm up** とした。生徒は元気よく答えていた。次に前時までの復習として「**to** 不定詞の用法」を確認し、本時では特に副詞の用法を強調した。教科書の文法のまとめページ (**Master the Pattern**) を利用して、解説と問題演習を行った。生徒の指名は番号が書かれたカードをランダムに引いて行われた。例文の訳や穴埋め問題については、予習が前提なので生徒も概ね速やかに答えていた。

次に教科書本文の CD を聞かせ、音読をした。意味の区切れ (スラッシュ) で分けた英語・日本語の対訳プリントを使って、リピート、個人読みなど、同じページを計 5 回程繰り返した。授業者によると、前期は訳読式で解説に時間をかけていたが、後期からは文法や訳すことよりも音読に力を入れて時間をかけているという。

内容確認では、プリントの各英文に番号がつけられており、ポイントを板書する際にも番号を先に書くため、どこの説明をしているのかをすぐに生徒がわかるようにしていた。本文内容は指示代名詞が指す内容、**to** 不定詞、関係代名詞、文型、同意語などを解説した。本文に **Mozart** や **jazz** が登場した際にはそれぞれの音楽を聞かせ、楽しませながら読み進めた。

本文内容確認後、再び教科書のまとめのページ (**Master the Contents**) に戻り、Q & A に取り組んだ。机間巡視により、「答え方がわからない」という生徒には助言を与えていた。

内容確認後、再び音読をした。対訳プリントを使い、ペアで日本語・英語を交互に言う。この際「できるだけ暗記で」と声かけをしていた。

最後に次回の予告とプリント配布、予習の指示をした。

4. 検討会 14:45~16:00

●授業者より

生徒の実態に伴い、まずは基本的な生活習慣の身についた生徒を育てなければならないと考えている。意欲的に生徒が活動する機会として音読を強化することが、**Active Learning** への橋渡しとなるようにしていきたい。前後期で授業スタイルを変えているので様々なことが模索中だが、1年間かけてレベルアップさせていければと思っている。

●参加者より感想・質疑応答

【感想】

- ・ 終始テンポが良く、授業者の明るい笑顔と表情で雰囲気が良い。
- ・ 音読の機会が多くて良い。
- ・ **Classroom English** も広く使われていて良い。
- ・ 本文の意味の区切れごとに番号をつけているのが良い。
- ・ プリントのバリエーションがあって良い。

【課題】

- ・ 本文をいきなり日本語→英語に訳させるより、逆の方が取り組みやすいのではないか。
- ・ 板書計画を見直しても良いのでは。
- ・ 一斉かペアの活動だったので、問題演習などでグループのチェック活動を入れてみたらどうか。
- ・ 既習文法や語彙を使って自分なりの英文を作らせてはどうか。

●専門委員から助言

学年間での連携については、学校独自の「シラバス」を徹底させることで解決できる。生徒・保護者にも公開すれば学習内容に対する疑問や不安が解消される。ポイントは誰が授業をしてもシラバスから外れないことである。

5. 閉会

●部会長より講評

今後の英語教育の課題はどのように **output** し、**productive** な活動にしていくかである。生徒が個々に英語を自分のものにして、いかに表現ができるかを視野に入れて、教育活動に当たってほしい。